

JSCE



NEWSLETTER

No.4 June 16, 2010

目次

巻頭言

高山信雄.....1

研究ノート

“Who's there?”

Hamlet and Julius Caesar

Noboru Fukushima.....2

研究ノート

気になる、古い、変な映画 その②

——悪い女に惹かれる男たち『イブの三つの顔』

清水純子.....5

研究ノート

ハベルの抽象衝動の出発点

L. W. Hubbell's Desire for Orderly Abstract Form

三芳康義.....7

研究ノート

ファンタジー文学の行方—文学と科学—

佐々木隆.....10

カルチュラル・スタディーズ

辺境の英文学教育に関するエッセイ

—アイルランド・沖縄・日本—

松山博樹.....16

連載研究コラム<ITと文学・言語・教育>

John Keatsの研究サイトと、基本的なWordの使い方の紹介

真砂久晃.....17

異文化体験旅行記

南米初訪問

原田俊明.....18

学会報告

日本英語文化学会例会報告

日本英語文化学会全国大会報告

岸山睦.....21

掲示板

.....22

編集後記

.....24

高山信雄

最近、本学会がめざましい発展の途上にあることは、喜ばしい限りです。とくに近年においては、田中保会長のもとで、協力学術研究団体として本邦の学術研究の一端を担う組織にまで成長して、今後の本学会の重要性がますます高まってきたことは、会員一同のご協力の賜物と考えております。

本学会は英語圏各国の文学や語学等を通して、わが国からすると異文化である英語圏文化を広く理解することが大きな目的ですが、同時に、その異文化理解を通して通底ではわが国の文化との比較検証を意図しつつ、自国文化の独自の良さを改めて再認識することも重要なことでしょう。異文化理解とはつまり、他へ視点を移しての自国文化の理解もその中に含まれるものと考えられます。

このような理念のもとに、本学会は発足しましたが、現在に至るまでの道程は決して単純なものではありませんでした。本学会の辿ってきた道を振り返ると、昨年の会報第3号で田中会長が述べられたように、その前身である研究会が、遙か上毛の地(群馬県)で1972年ごろから発足に向けての胎動があり、やっと3年後の1975年にビビュロス同人会として誕生しました。翌1976年に機関誌「ビビュロス」第1号が発刊されましたが、手元にあるその創刊号のページを開くと、8編の論文と15名の会員名簿が目に入ります。その後この同人会は順調に発展し、1984年末には会員数は40人に達しました。

本学会の発展の第2段階は、同人会から研究会へと名称が変更された1992年でした。やがて会員数もさらにふえ、そして研究発表も投稿論文も多くなってきました。やがて1998年度から現在の「日本英語文化学会」となって、本学会発展の第3段階が訪れました。この年の9月、学会としての初めての全国大会が、法政大

佐々木隆

プロローグ

「文学と科学」は想像力と実証を基礎に創造力によって現実化される科学と微妙な関係を保ちながら今日に至っている。特に19世紀以後の英米文学を中心に見て行けば、Mary Shelley. *Frankenstein* (1818)、Robert Louis Stevenson. *The Strange Case of Dr Jekyll and Mr Hyde* (1886)、H. G. Wells. *The Time Machine* (1895)、Bram Stoker. *Dracula* (1897)、“robot”という言葉の誕生で知られる Karel Čapek. *R.U.R.* (1920, チェコスロバキア)、Isaac Asimov. *I, Robot* (1950) など枚挙に暇がない。ファンタジー文学について今後の展望について考察していきたい。

1 「ファンタジー」とは何か

まず「ファンタジー」とは何かを考えてみよう。手元にある『広辞苑』(第6版)の「ファンタジー」の見出し語には次のように記載されている。

- ① 空想、幻想。白昼夢 ② 幻想的な小説・童話 ③ 幻想曲⁽¹⁾

では英語の辞典にはどのように定義されているだろうか。Concise Oxford English Dictionary (2004)の“fantasy”には次のように定義されている。

1 the faculty or activity of imagining improbable things. 2 a genre of imaginative fiction involving magic and adventure. 3 a fantasia ⁽²⁾

ここでは“imagining”“imaginative”といった言葉が気になるところだ。上田和夫編『イギリス文学辞典』(研究社、2004年1月)の

「fantastic/fantasy」の冒頭には以下のような記述がある。

現在のところ必ずしも明確な定義はなされていないが、一説によると、広義の「ファンタジー」または「ファンタスティック」は非写実的な話をさし、そのなかには神話、伝説、民話、妖精物語、寓意物語、夢物語、SF、ユートピア物語 utopia、さらに狭義のfantasyを含む。そして狭義のfantasyは、不可能な出来事や世界を扱い、その内部で一貫性のある物語を指す。⁽³⁾

ここで「明確な定義はなされていない」という記述が気になるところだ。

「ファンタジー」とは何かを探るために、さらに佐藤さとる『ファンタジーの世界』(講談社、1978年8月)を開いてみよう。ファンタジーを一つのジャンルとして位置づけるためには、まだまだ整理が必要である。例えば、空想物語、幻想物語として訳されているものと同じと考えてよいのか。さらには、怪談、童話、伝説(広い意味で言えば、神話、寓話も含まれるか)、伝奇物語、SF、あるいはメルヘンなどどう棲み分けしていくのかといったことだ。ファンタジーはメルヘンを母体にし、分化してきたと考えてもよいかもしれない。⁽⁴⁾

こうなると、「メルヘン」とは何かも触れなければならない。ファンタジーの母体であるメルヘンについて簡単に触れておくと、1812年に『グリム童話集』の第1巻が出版、1835年に『アンデルセン童話』が出版されていることはどうしても触れておかなければならないだろう。グリム兄弟は文法の研究するために、いわゆる伝説や昔話を収集していたのだが、それが『グリム童話集』としてまとめられたのである。昔話、メルヘンでは、主人公が没個性的な類型的主人公であるのに対して、ファンタジーでは主人公ははっきりとした個性というものを持つようになる。その意味で言えば、『グリム童話集』の登場人物よりも、『アンデルセン童話』の方が、ファンタジー的要素を備えていると言っ

てよいかもしれない。

池田紘一他編『ファンタジーの世界』(九州大学出版会、2002年3月)には、眞方忠道『ファンタジーの世界』への招待で「ファンタジーの由来」が説明されている。英語の *fantasy* からさらにギリシア語の「ファンタシア」(*phantasia*) にさかのぼって説明している。「見えるようにする」→「表す、示す」といったことから、「外見、あらわれ、みせびらかし」、さらには「想像力」を意味するところに辿りつくという。⁽⁵⁾ Aristotle にまでさかのぼって説明している。ギリシア語やサンスクリット語に触れ、「ファンタジー」の源泉をたどろうとしている。実はジャンル等の定義をしようとする時、こうした分析は基礎研究として押さえておくべきものであろう。

さらに、2004年度国際子ども図書館児童文学連続講座講義録「ファンタジーの誕生と発展」(2005年10月)では、「ファンタジー」の定義について Dennis Butts の *Stories and Society: Children's Literature In Its Social Context* (1992) や Kathryn Hume の *Fantasy and Mimesis* (1984) を軸に展開している。「ミメシス」は芸術論では必ず登場してくる Aristotle の考え方であり、模倣論であり、ファンタジーだけでなく、文学は想像力の産物である。ファンタジーは想像力なくしては成り立たないものだ。以降は「ファンタジーの誕生と発展」を紹介していきたい。

『ファンタジーの誕生と発展』は、国際子ども図書館の2004年10月に開講された「児童文学連続講義録」をまとめたものである。全体の内容は以下の通りである。

村山隆雄「刊行にあたって」／神宮輝夫「ファンタジーの周辺」／間宮史子「メルヘンからファンタジー」／定松正「イギリスのファンタジー」／白井澄子「アメリカ・カナダのファンタジー」／井辻朱美「ファンタジーとはなにか」／千代由利「国際子ども図書館で児童文学(ファンタジー)を調べる」／渡辺和重「児童書総合目録活用術」／神宮輝夫「研究

報告：イングラム・コレクションの魅力」／「講師略歴」

間宮史子「メルヘンからファンタジーへ」の中では、「ファンタジーとは何か」をリサーチしていくと、必ず辿りつくのは「メルヘンとは何か」といったことだ。つまり、「ファンタジー」≠「メルヘン」であることははっきりしているが、共通する部分もあることから、その関連性が問題となろう。「メルヘンはファンタジーの源と考えられております」⁽⁶⁾この指摘はよく言われることであるが、メルヘンの中にファンタジー的要素があるからだ。その際たるものは

人間が人間の住む世界とは異なる世界を訪れるのは、人間が人間の住む世界とは異なる世界を訪れたことを語る話です。⁽⁷⁾

この異界訪問譚はまさにファンタジーの得意とすることである。

井辻朱美「ファンタジーとはなにか」の中では「昔は世界が2つ、別世界と現実があるという世界観ではなかった」という表現は納得のいくものである。つまり、現実と不思議の世界に境がなかったということだ。井辻はまずファンタジーを大きく2つに分類している。

- 1) 1番古いタイプのファンタジー、いわゆる昔話、おとぎ話。不思議なことが起こる話。
- 2) ハイ・ファンタジー。信じられないような世界に行って冒険してきた話。最初から別世界のお話が展開している、あるいは、地球の過去の時代の話で一見歴史小説風なのだけれども、そこにちょっと魔法が入っていたりするというような、一元的魔法ファンタジーです。
- 3) 枠物語。現実の世界があって、そこで人々が生活をしていて、それからどこか扉を開けてみたり、あるいは、誰かがやってきて不思議な魔法を見せてくれたり、あるいは、別の自分のパラレルワールドの世界へ行ってしまったり、と2つの世界が描かれている。⁽⁸⁾

ファンタジーの定義を巡って、有益な単行本がある。翻訳本であるが、まさにファンタジーを扱った図書である。David Pringle. *The Ultimate Encyclopedia of Fantasy* (Carlton Books Limited, 1998)の翻訳、ディヴィッド・プリングル編/井辻朱美日本語版監修『図説ファンタジー百科事典』(東洋書林、2002年11月)である。

「ファンタジーとは何か」といった定義については「はじめに一心の願望の成就」のところで最もシンプルな定義として「ファンタジーは〈心の願望〉の物語である」⁽⁹⁾を冒頭で紹介していることは興味深い。百科事典との名の通り、ファンタジーに関する分析が深く行われている。SFとの関係、古い宗教的要素などにも触れている。「はじめに一心の願望の成就」とあるが、その内容は1つのファンタジー論として独立しているといってもよい。最後に次のような文章で締めくくられている。「この古く根源的な欲求と憧憬に向かって、語りかける形式なのである」。⁽¹⁰⁾

「ファンタジーの類型」(Types of Fantasy)として9項目取り上げているので紹介しておきたい。

妖精物語、動物ファンタジー、アーサー王もの、アラビアン・ナイトもの、支那趣味、秘境もの、ユーモア・ファンタジー、剣と魔法の物語、ヒロイック・ファンタジー

以降は具体的な作品に触れながら、ファンタジーについて考えていきたい。

2 英米文学のファンタジー

安藤聡『ファンタジーと歴史的危機』(彩流社、2003年1月)という本がある。副題は「英国児童文学の黄金時代」とある。「序章 英国児童文学三期の黄金時代—1860年代、1900年代、1950年代」とあるが、「ファンタジー」とは何かを明確に定義してはいない。「十九世紀後半は、一般に英国児童文学の黄金時代と言われる」⁽¹¹⁾とその冒頭には記載されている。

第一次黄金時代 (1860年代)

The Water-Babies (1863)

Alice's Adventures in Wonderland (1865)
等

第二次黄金時代 (1900年代)

Peter Pan (1902)

The Wind in the Willows (1908) 等

第三次黄金時代 (1950年代)

The Chronicles of Narnia (1950-1956), *The Barrowers* (1952), *The Children of Green Knowe* (1954), *The Lord of the Rings* (1954-1955), *Tom's Midnight Garden* (1958)

1859年に Charles Darwin. *On the Origin of Species by Means of Natural Selection* が発表されたことはファンタジーの黄金時代を迎えることと決して無関係ではないだろう。

伝統的キリスト教に支えられた世界観を揺るがせ、当時の人々を不安に陥れるに十分であった。⁽¹²⁾

定松正(1933-)によれば、ファンタジーの推進に一役買った人物として John Locke (1632-1704) を上げている。新しい人間観、新しい価値観を推し進めていた人物である。神を中心として価値観から、人間の本性に注目する時代に入ったのである。つまり、外見から判断する時代が終わり、大人と子どもは違うという人間認識が生まれ、新しい児童観が生まれた、育ってきたのである。それが、17世紀から18世紀である。ロマン主義の時代である。19世紀のファンタジーの本格的登場の準備が整っていたということになる。ファンタジーについて定松は以下のように述べている。

ファンタジーの世界は現実の世界とは無縁の世界ではないということです。より現実的な問題を照らし出す寓話的な特徴を、ファンタジー作品は秘めているということを押さえるのが重要です。⁽¹³⁾

こうした中で、キリスト教という宗教背景を無視することができないという。

旧教徒によるローマ・カトリックを見直そうとするオックスフォード運動が、このファンタジー文学にもかなりの影響をおよぼすこととなります。牧師が筆をとるという風潮を促すのです。『水の子』を書いたキングズリは国教会の牧師ですし、ルイス・キャロルは父親が牧師で彼自身もオックスフォードのクライスト・チャーチ学寮（牧師養成校）を卒業し、その職には就かなかつたものの、その資格を得ました。⁽¹⁴⁾

産業革命による貧富の差、現代で言う格差社会の問題が存在していた。時代的には Darwin. *On the Origin of Species* を発表したのが1859年であり、*The Water-Babies* が発表されたのが1863年である。定松は触れていないが、科学と宗教の問題、さらにはそれを文学の中に持ち込んだとも考えられないであろうか。それが出来る手法はファンタジーという異界を持ち込める文学ジャンルであったのではないか。しかし、いづれにしても、牧師がファンタジーを書いたという点は注目し値する。

アメリカの初期のファンタジーの代表は Frank Baum. *The Wonderful Wizard of Oz* (1900)。ヨーロッパのお伽噺とは違う。魔法と妖精を中心とするイギリスのものと較べると楽しい空想物語である。

工業化するアメリカ、科学技術が進み、いろいろな新しい機械ができていくアメリカが見えてきます。神秘性はほとんど感じられませんが、別世界に行ってもやはり人間の心が大切だという点や、「頑張って何かをやればきっと成功する」というアメリカらしい考え方が見えるファンタジーで、ある意味で、その後のアメリカのファンタジーの要素をすべて備えているように思います。⁽¹⁵⁾

Frank Richard Stockton. *The Griffin and the*

Minor Canon (1885) という作品も見逃せない作品のひとつである。

アメリカにはケルトの素材がないため、妖精等はすべてイギリスのファンタジーから借用することになる。特に1960年代、1970年代にこうした作品が発表されるが、理由の1つに社会的なことが上げられよう。

アメリカは第二次世界大戦後、特に、ベトナム戦争が泥沼化して、それに反対する多くの若者が平和を訴える時代に入っていきます。⁽¹⁶⁾

善や悪の問題など、*The Chronicles of Narnia*, *The Lord of the Rings* (1954-1955) の影響を受けたようである。また、動物ファンタジーとしては E.B. White. *Charlotte's Web* (1951) は現在でもよく読まれている。アメリカのファンタジーを幾つか紹介しておきたい。

- Frank Richard Stockton. *The Griffin and the Minor Canon* (1885)
Frank Baum. *The Wonderful Wizard of Oz* (1900)
Ruth Stiles Gannett. *My Father's Dragon* (1950)
E.B. White. *Charlotte's Web* (1951)
Lloyd Alexander. *The Black Cauldron* (1965)
*プリデイン物語シリーズ
Ursula K. Le Guin. *A Wizard of Earthsea* (1968)
*ゲド戦記シリーズ
Susan Cooper. *The Dark is Rising* (1973)
*闇の闘いシリーズ
Norton Juster. *Phantom Tollbooth* (1989)

3 最近の英米ファンタジーの映画化

映画の三大要素が「映像、脚本、音楽」とすれば、その内容は脚本に依るところが大きい。この意味で文学作品が取り上げられるのだろう。

クリス・コロンバス監督『ハリー・ポッターと賢者の石』(2001) / (J.K.ローリング原作) (英)

ピーター・ジャクソン監督『ロード・オブ・ザ・リング』(2001) / (J.R.R. トールキン原作) (英)

クリス・コロンバス監督『ハリー・ポッターと秘密の部屋』(2002) / (J.K. ローリング原作) (英)

ピーター・ジャクソン監督『ロード・オブ・ザ・リング／二つの塔』(2002) / (J.R.R. トールキン原作) (英)

ピーター・ジャクソン監督『ロード・オブ・ザ・リング／王の帰還』(2003) / (J.R.R. トールキン原作) (英)

アルフォンス・キュアロン監督『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』(2004) / (J.K. ローリング原作) (英)

宮崎駿監督『ハウルの動く城』(2004) / (ダイアナ・ウィン・ジョーンズ原作) (英)

ティム・バートン監督『チャーリーとチョコレート工場』(2005) / (ロアルド・ダール原作) (英)

アンドリュー・アダムソン監督『ナルニア国物語／第1章 ライオンと魔女』(2005) / (C.T.ルイス原作) (英)

マイケル・ニューウェル監督『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』(2005) / (J.K. ローリング原作) (英)

宮崎吾朗監督『ゲド戦記』(2006) / (アーシュラ・ル＝グウィン原作) (米)

シュテファン・マイヤー監督『エラゴン』(2006) / (クリストファー・パオリーニ) (米)

クリス・ワイツ監督『ライラの冒険 黄金の羅針盤』(2007) / (フィリップ・プルマン原作) (英)

デヴィッド・イエーツ監督『ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団』(2007) / (J.K. ローリング原作) (英)

アンドリュー・アダムソン監督『カスピアン王子のつのおえ』(2007) / (C.T.ルイス原作) (英)

デヴィッド・イエーツ監督『ハリー・ポッターと謎のプリンス』(2009) / (J.K. ローリング原作) (英)

ポール・ワイツ監督『ダレン・シャン』(2009) / (ダレン・シャン原作) (英)

クリス・コロンバス監督『パーシー・ジャクソンとオリンポスの神々』(2009) / (リック・リオーダン原作) (米)

ティム・バートン監督『アリス・イン・ワンダーランド』(2010) / (ルイス・キャロル原作) (英)

また、今年の夏に公開予定のものとして米林宏昌監督『借りぐらしのアリエッティ』(Mary Norton. *The Borrowers*. 原作) も気になるところである。

エピローグ

現代は「ファンタジー」の世界がありえないような想像の世界であったものも、科学の力で現実に可能になってきたこともある。そういった意味でファンタジーは科学の発達と無縁ではないと思える。なぜなら、「ファンタジーはかなわざる語るものだった」⁽¹⁷⁾ からだ。これまでファンタジーといった考え方をしていたもの、あるいはSFと考えていたものが、科学の発達により、現実になっている傾向がある。こうしたことを考えると、科学と文学はともに想像力(イマジネーション)から始まることになる。

井辻朱美(1955-)は『ファンタジー万華鏡』(2005)の中で最近のファンタジーについて次のように述べている。

ファンタジー・ジャンルの状況は、一九九〇年後半ごろに大きくさまがわりした。言うまでもなく「ハリポタ」を象徴とするネオ・ファンタジー群の大流行である。⁽¹⁸⁾

科学、テクノロジーの発達により、ユビキタス時代が到来してしまうと、ファンタジーにも大きな影響を当てることとなる。前述の『図説ファンタジー百科事典』は原書の出版が1998

年で、Harry Potterシリーズは取り上げられていない。ネオ・ファンタジーとは新しいファンタジー観である。これまでの現実 vs 別世界といったようなパラレル・ワールドが構図としてあったが、現実自体が虚構化していく傾向の時代、あるいは科学の発達と共に非現実が現実化されていく現代においては、新しくファンタジーとは何かといったことを考えていく必要がありそうだ。

参考文献

Westfahl, Gary, Slusser, George and Leiby, David, editors. *Worlds Enough and Time: Explorations of Time in Science Fiction and Fantasy*. Greenwood Press, 2002.

Carlson, Ralph, acquiring editor. *The Oxford Encyclopedia of Children's Literature*. Oxford University Press, 2006.

注

- (1) 新村出編『広辞苑』(第6版)(岩波書店、2008年1月)、p.2417.
- (2) *Concise Oxford English Dictionary* (Oxford University Press, 2004), p.515.
- (3) 上田和夫編『イギリス文学辞典』(研究社、2004年1月)、p.123.
- (4) 佐藤さとる『ファンタジーの世界』(講談社、1978年8月)、p.67.
- (5) 眞方忠道『『ファンタジーの世界』へ招待』(池田紘一他編『ファンタジーの世界』九州大学出版会、2002年3月)、p.3.
- (6) 国立国会図書館国際子ども図書館編『ファンタジーの誕生と発展』(国立国会図書館国際子ども図書館、2007年10月)、p.22
- (7) Ditto.
- (8) *Ibid.*, p.79.
- (9) ディヴィッド・プリングル編/井辻朱美日本語版監修『図説ファンタジー百科事典』(東洋書林、2002年11月)、p.6.
- (10) *Ibid.*, p.26.
- (11) 安藤聡『ファンタジーと歴史的危機』(彩

流社、2003年1月)、p.7.

(12) *Ibid.*, p.19.

(13) 国立国会図書館国際子ども図書館編『ファンタジーの誕生と発展』(国立国会図書館国際子ども図書館、2007年10月)、p.22

(14) Ditto.

(15) *Ibid.*, p.56.

(16) *Ibid.*, p.59.

(17) 井辻朱美『ファンタジー万華鏡』(研究社、2005年5月)、p.5.

(18) *Ibid.*, p.3.

(武蔵野学院大学)